

永野小学校・学校だより(7月)



みんなほんもの！

副校長 宮坂 優子

職員室にいますと、たくさん子どもたちが外から声をかけてくれます。「先生おはようございます」と朝の挨拶をしてくれる子、帰りに、図工の時間に作った作品を見せにきてくれる子、今日一日の楽しかった出来事を伝えにきてくれる子、ときには「さんが、こんなことを言うんだよ」と怒ってくる子もいます。そんな中で、先日、1年生の子が、育てている花の水やりにきて「こんなに大きくなったよ」と見せてくれました。それは、朝顔の芽でした。その子は、朝顔の芽を愛しそうに見つめていました。その子の目を見ながら、昔教えた子どものことを思い出しました。

3年生の理科の学習に、植物の生長を観察する学習があります。好きな花を植えその生長を調べていました。A君は、コスモスの種を植えました。友だちの芽が出てきたのに、A君の芽はなかなか出ません。1週間後、やっと出てきた芽は、明らかにコスモスではなく、草です。友だちから、「それ草だよ」と言われてもA君は毎日水をやり、大事そうに育てていました。私は、新しい種を植え直そうかと思いましたが、A君があまりにも真剣に育てているので迷ってしまいました。しばらくして、「A君、それコスモスじゃないかもしれないよ」と伝えると、「いいんだ」といい、それからもずっと水やりを続けていました。ある日、その草は可憐な花を咲かせました。A君の喜びは察しがつくでしょう。A君だけではなくクラスの友だちも一緒に喜びました。その時A君の言った言葉は、今でも忘れられません。「草も他の花と同じだね。根があって、葉があって、花だって咲くんだね。かわいらしさも同じだね。」Aくんは、草だと分かっていた育てていたのです。私は、A君から大事なことを教わりました。植物の観察というと、名前のある植物しか考えていませんでした。その固い頭がA君のおかげで少しだけ柔らかくなった気がしました。そして、育てる学習の奥深さを感じました。

みんなほんもの

トマトがねえ
トマトのままでいれば
ほんものなんだよ
トマトをメロンに
みせようとするから
にせものに
なるんだよ
みんなそれぞれに
ほんものなのに
骨を折って
にせものに
なりたがる

私の好きな詩人 相田 みつをさんの詩に、「みんなほんもの」という詩があります。

ありのままでいいよと相田さんは言っているのだと思います。私たち大人はいつも、それはだめ、こうでなければだめ、トマトじゃだめ、メロンになれと言い続けているように思います。自分に自信がないとき、「それでいいよ」「それがいいよ」といわれるとどんなに楽になるか。

「そのままでいいよ」この言葉は、子どもへの最高の愛情の表現です。無条件の承認です。このように育てられた子は、必ず生まれもったものを豊に開花するでしょう。

しかし、私たちは、たいてい、条件を付けた愛情を示しがちです。これができれば褒めてあげる、喜んであげる、これができないから腹が立つ。そして、その条件が大きければ大きいほど、子どもは自分への劣等感をもってしまいます。

草に毎日水をやり、草を草としてかわいがっていたA君のように トマトのままでいいよ、トマトのままだいいよと、心から言ってやれる大人になりたいと思います。